

質的データ分析によるスポーツ少年団の研究

岡田 猛 藤島仁兵 鬼塚幸一* 山下孝文**

A Study on Junior Sports Club on the Basis of Qualitative Data

Takeshi OKADA Jinpei FUJISHIMA Koichi ONITSUKA

Takafumi YAMASHITA

1. はじめに

昭和52年度のスポーツ少年団本部の調べによると、全国でのスポーツ少年団の規模は、団数15,831、団員数198,176人となっており、スポーツ少年団が小学生を主な対象とした主要な社会体育の場になっていることは明らかである。

ところで、近年、少年団の活動のあり方に対するさまざまな批判も耳にするところである。先般の地元新聞の投書欄にも「スポーツ少年団に行き過ぎ」と題する、次のような匿名の主婦からの投書が掲載され、物議をかもした。^{注1)}「小学校の対外スポーツ競技は、制限されているときいています。ところが最近、各種スポーツ少年団の活動が盛んになってきました。なかにはそのスポーツ少年団の練習を毎日欠かさず、しかも数時間も練習しているところがかかなりあるようです。いろんな試合があり、その勝敗にとらわれ過ぎているところに原因があるようです。対象者はまだ年若い小学生です。どんなによいねらいがあっても、子供たちの練習ぶりを見ていると、どこかに欠陥があるような気がします。子供には夕方するべき仕事もあり、また自由な時間もあるべきです。学校体育としては対外スポーツ試合に対して消極的なのですから、社会体育側の考え方をよく考慮したうえで、活動すべきだと思います。それにスポーツ少年団の指導者には学校の先生が多いということですが、その先生方は本務の学級経営のほうはどうなっているのでしょうか。おろそかにされている点はないでしょうか。関係当局はすぐ少年団活動の実態を調査し、もし好ましくない点があったら一日も早く善処してください。」

これまでにも、スポーツ少年団については、その指導者を中心にして、実態の把握と今後のあり方の検討を目的として少なくない調査がなされてきた。われわれは今回、新しいデータに依拠して、これまでの調査結果を踏まえつつ、スポーツ少年団の実相にせまりたいと考え、この研究を行った。

* 鹿児島工業高等専門学校

** 鹿児島短期大学

2. 方 法

言うまでもなく、社会現象を分析・解明する方法として社会調査法がある。そこでは、統計的調査法による数量的データと、事例的調査法による、手記、日記、小説などの質的データが用いられる。前者が、(1)追体験的な了解可能性の稀薄さ、(2)総合的、多次元的な把握の困難さ、(3)変化のプロセスや可能性に関する動的な把握の困難さ、という固有の欠点を持ち、「たしかだがおもしろくない」分析に終るのに対し、後者は、(1)事例そのものの「代表性」の保証がないので普遍的な法則を導き出すことが困難である、(2)分析の手順や着眼点を「標準化」し難いために、不正確な観察や恣意的な推論の入りこむ余地を与える、という固有の弱点を持ち、おうおうにして「おもしろいが、たしかさがない」立論になりがちである、といわれている。そこで二つの方法、データの統合方法として、安田、^{注2)} R. White,^{注3)} Lazarsfeld & Robinson^{注4)} 等がそれぞれ独自の手続きを提案しているが、見田はそれらのいずれもが二つのデータのもつ独自の強みを犠牲にした単なる折衷であるとして、図1に示すような多段式の分析法を提案している^{注5)} のでこの考え方をとりたい。

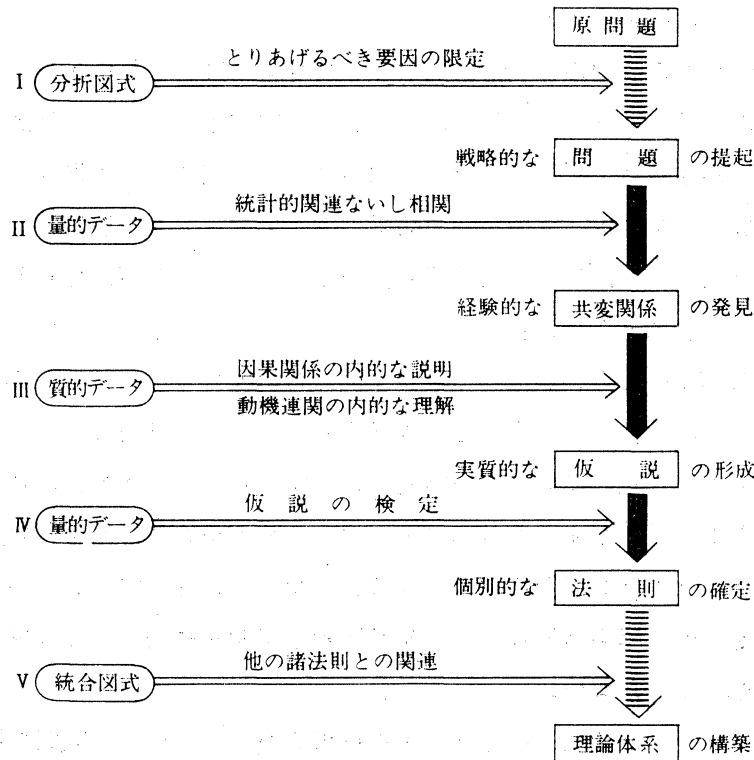


図1. 見田による多段分析の設計

ところで、今回用いたデータは、図2に例示したように、指導者、モットー、戦績等を紹介した「横顔」と、団員の作文である「団員の記」からなる、昭和52年度一年間の読売新聞鹿児島版に掲載されたスポーツ少年団の紹介記事38片である。内容、掲載の選択基準（地域別、申し出）からみても質的データとして取り扱うのが適当であると思われるので、見田の提唱する多段式分析法の第Ⅲの局面として位置づけし分析した。

小さな学校でも やればできる

横 頭

魚見ソフトボール スポーツ少年団

指宿市

指宿市内の小学校で、一番小さな魚見小学校の児童たちが、結成しているが、みんなが熱心。練習にも力がこめられている。指導監督に当たっているのは、指宿郵便局勤務の諏訪園一行さんだ。

「小さい学校だからといって、いじけてはダメ。子供たちがやればできるのだという自信をひききせるために結成したところ。練習は毎日曜日の午後から三、四時間、たっぷり練習させる。中には源を流す子もいるが、チームから去る者はまだ一人もいない。練習が終われば、いろいろな相談に乗ってくれる。やさしいおじさんだから。監督であるばかりでなく、ソフトボールの審判免許を持ち、校医、市民体育大会、

市内の各ソフトボール大会に引き張り出された。休む暇もない忙しい人だ。

団員たちは礼儀正しく、根性もある。体の弱い子も、練習すると元気になり、病気で練習を休むこともほとんどない。のびのびと練習し、声援も熱心である。指導監督は「やりがいがある。子供たちが負けず、わたくしもおんぼろでいける」と張り切っている。

- ▽設立 四十八年
- ▽団員 十八人
- ▽戦績 今年三勝五敗



団員の記 まぎびしい練習に充実感

魚見小 5年 八木精一郎

ぼくは、もうソフトボール少年団に入って三年になる。今までに何回も試合をしているが、かんとくが

いつも試合のまぎびしい感じが、ソフトボールに「相手チームは、相手チームがどんなきたないヤシを言っても、よいプレーを見せてくれたら、よく手をする気がない」と多々だ。勝ち負けは、おもしろい。いきってやれ」といふ。ぼくたちは「よしがんばるぞ」といふフアイトが、

試合中には父親がおうえんしてくれるが、なんだかんだいっただうてかんとくのかけてくれる言葉がないと、試合中に落ち着かない。練習の時はノックをしながらも「しつかりせんか」とまてる人がかわつたように、すくくわい。

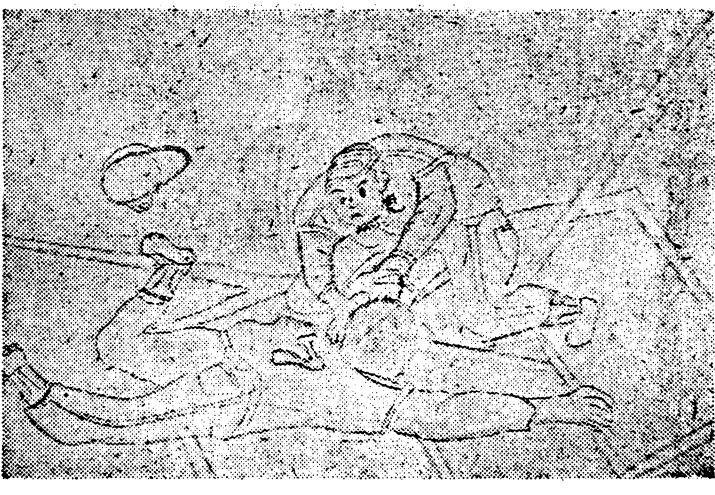
夜暗なうてユニフォームを真つ黒にして帰ると、ほんとうに練習した気分になる。これからもかんとくはじめ、みんながんばって人といっただうなソフトボールだ。

こわい監督 なぜか好き

魚見小 6年 前園 昭喜

ぼくたち魚見ソフト少年団は、毎週日曜日の午後四時からソフトボールの練習をしている。六年は三人、五年は七人、四年は一人、

ぼくは、今年一回もやらず練習をやっている。夏休みの前は、暑い日が続いて、「いっそのことやめようか」と思った日もあった。ただ、その日のその時間になると、自然に練習に行く。「それだけソフトボールが好きなんだなあ」と思ったりする。かんとくはまぎびしいけれど、な



〈え〉 魚見小6年 二石 誠也

かが好きだ。それだけかんとくを尊敬しているのだとぼくは思う。ぼくは、ソフトボールを通じて、健康な心と体が、根性を作ろう。これからはがんばって練習しよう。来年はいよいよ中学生。かんとくは、野球部にはいってかんとく。

くじけずに やり通すゾ

魚見小 6年 福重 健創

四年生のとき、みんなにすすめられてこの魚見ソフト少年団に入りました。今はもう二年目だ。キヤンペンに選ばれている自分が信じられない。レキニャーに力が入っていると、今年が小学校最後の年でもある。かんとくをこえては思いません。

はい、まだまだまぎびしいっしょにはいっただうなソフトボールだ。かんとくは、今年一回もやらず練習をやっている。夏休みの前は、暑い日が続いて、「いっそのことやめようか」と思った日もあった。ただ、その日のその時間になると、自然に練習に行く。「それだけソフトボールが好きなんだなあ」と思ったりする。かんとくはまぎびしいけれど、な

図2. チェスト行け、の一例

3. 結果と考察

今回の研究をするにあたり、先行研究として分析した、少年団に関する統計的調査は表1の通りであり、そこで取り上げられている主な要因の連関図は図3のようにまとめられる。これは見田による多段式分析法の第Ⅱの局面に該当する段階である。個々の要因項目における各調査結果間の異同、傾向については、見田の第Ⅳの局面で必要となってくるが、ここでは今回の項目にレリヴェントな項目のみを必要に応じて取り出すことにとどめる。

表1. 分析の対象とした、スポーツ少年団に関する統計的調査

番号	テ マ	調 査 者	掲 載 誌	発 表 年 月
1	日本スポーツ少年団の現状とその問題点 —東京都を中心にして—	木村他	体育学研究 XI—5	1967.7
2	日本スポーツ少年団の現状と問題点	木村国次	体育学研究 13—5	1969.7
3	スポーツ少年団指導者に関する調査	金子他	体育学研究 13—5	1969.7
4	スポーツ少年団の実態に関する一考察	葛西, 松坂	北海学園大学・学園論集 14巻	1969.
5	サッカースポーツ少年団に関する調査研究	田中他	体育学研究 14—5	1970.7
6	長崎県下における社会体育の展開(第1報) —県下スポーツ少年団(指導者の実態を 中心として)に関する調査—	松尾, 岡崎	長崎県立国際経済大学 調査と研究 第2巻第1号	1970.9
7	スポーツ少年団指導者に関する社会学的研究	金崎良三	九州大学体育学研究 第5巻第1号	1973.10
8	社会体育の指導者に関する研究(第2報) —三重県における社会体育指導者の種別 による活動の実態と意識—	藤田他	三重大学教育学部研究紀要 第5巻第1号	1976.
9	スポーツ少年団実態調査報告書 1975	日本スポーツ 少年団本部	報告書	1976.3

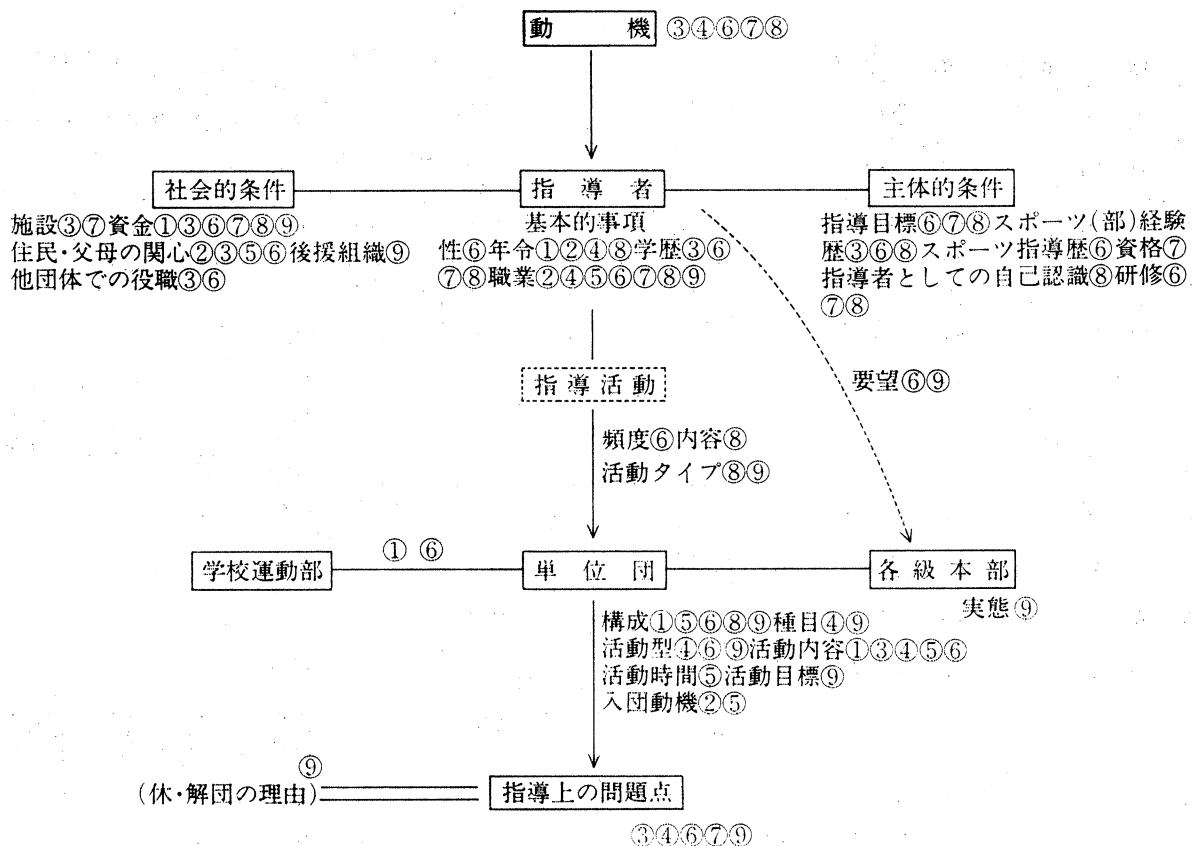


図3. これまでの統計的調査で取り扱われた要因連関図

表2に示したのが、今回の研究で用いたデータの概略的な分析表であるが、そこで見られる幾つの特徴点、問題点を、先の要因連関図における分析と可能な範囲で対照するという形で考察を進めてゆきたい。

(1) 種目をみると剣道をはじめとして、当該年令の学校では正課体育として採用されていない種目が多種目にわたって高い割合で採用されているが(全国レベルでも同じ④⑨)、これらの種目では指導者の方針がストレートに団員に伝わる傾向もあり、^{注6)} 指導方法とも絡んで、教育的配慮が必要になってくる。

(2) 練習時間についてであるが、前述した投書にもあったように、練習時間の長さは、剣道、空手といった格技に特に顕著である。これは種目の特性によることもあるであろうが、毎日早朝1時間、午後1.5時間の練習を課している少年団の団員の手記に、「試合前の時は日曜日にも練習がありました。そんなときは、『どうしてわたしは、剣道部にはいったのだろうか』と思うこともありました」^{注7)}とあるように、団員にとって時に苦痛を感じさせることになっている。なお、調査⑤によると1日平均2～3時間の練習をしている団がサッカーにおいても56.7%ということであり、全体的にみても練習時間が多い傾向が伺える。

